



Title	アイヌ研究におけるネイティブの葛藤：知里真志保の場合
Author(s)	桑山, 敬己
Description	生誕百周年記念シンポジウム「知里真志保 人と学問」. 平成21年2月22日. 札幌市.
Citation	知里真志保 人と学問：生誕百周年記念シンポジウム予稿集, 9-16
Issue Date	2009-02-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38285
Type	conference paper
File Information	2_9-16.pdf



アイヌ研究における
ネイティブの葛藤
——知里真志保の場合——

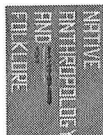


桑山敬己
北海道大学大学院 文学研究科
2009年2月22日

1 発表の背景

- なぜ私がこのシンポジウムに？
- ネイティブ (native) にまつわる問題を、過去10数年論じてきた。
- ネイティブ＝「出生地の」「土着の」「生まれつきの」
- ネイティブのアイヌ＝アイヌとして生まれ育った人

- 『ネイティブの人類学と民俗学：知の世界システムと日本』（弘文堂、2008年12月刊行）
- *Native Anthropology: The Japanese Challenge to Western Academic Hegemony* (Trans Pacific Press, 2004) 『ネイティブの人類学：西洋の学問的覇権に対する日本の挑戦』の日本語版




- 本の主題＝「知の世界システム」におけるネイティブの地位
- 知の世界システム＝文化人類学の場合、英米仏が世界の中心を占めていて、そこで異民族に関する知識が生産される。日本を含む他地域は世界の周辺に押しやられ、中心で生産された知識を消費するのみ。周辺で生産された知識は、どんなに貴重なものであっても中心では尊重されず、世界的に流通しない。
- 事例＝日本研究
- 英語圏の日本研究＞日本の日本研究
- 日本人の日本に関する語りが世界に通じない。

- 11年間のアメリカ滞在時に痛感
- 1982年から1989年、UCLA (U of California, Los Angeles) 留学
- 1989年から1993年、VCU (Virginia Commonwealth U.) 助教授
- 私のこれまでの関心＝世界と日本（和人）
- 2003年12月 北海道大学に移る
- 自著の主張が和人とアイヌの関係に当てはまることに気づく。
- 例) アイヌがアイヌについて言ったことが、和人の学界では通らない。
- 例) アイヌは研究対象にすぎず、学問的対話の相手とはみなされない。→「もの言わぬ土人」（従来の文化人類学全体にあてはまる認識）

2 発表のスタンス

- 私のこれまでのネイティブ一般に関する研究を参照枠として、知里真志保について語る。
- 不確かなことは質問として提示するので、知里の人和業績に通じている方々の教えを乞う（当日でも後日でも）。
- 知里真志保の理解を深め、ネイティブ一般の研究に資する。

3 知里の伝記

- ・藤本英夫『知里真志保の生涯：アイヌ学復権の闘い』（草風館、1994）
- ・新潮選書『知里真志保の生涯』（1982）の復刊
- ・知里と関わった人々に数多くインタビュー
- ・個人的側面に入り過ぎとの批判も



- ・『知里真志保著作集』（平凡社、全4巻、別冊2巻『分類アイヌ語辞典』）からの適切な引用
- ・藤本は『著作集』の事実上の監修者の1人
- ・日本民俗文化体系12『伊波普猷・金田一京助』（講談社、1978）の金田一の部分執筆
- ・藤本英夫『銀のしずく降る降るまわりに：知里幸恵の生涯』（草風館、1991）



4 ネイティブの概念

- ・ネイティブ (native)：ラテン語の *nativus* に由来。「生まれる」「生来の」という意味。
- ・本来は誰もがどこかの場所のネイティブである。
- ・植民地時代の人類学者は、「未開」社会の人びとをネイティブと呼びならわした。
- ・「土人」に近いニュアンス。
- ・参考) 原住民=aboriginal
先住=indigenous

なぜあえてネイティブと言うか

- ・植民地時代のネイティブは、あくまで研究対象であり、「もの言わぬ土人」であった。
- ・脱植民地化と教育の普及の結果、ネイティブはものを読み、ものを言うようになった。
- ・もの言わぬ土人→もの言う文士
- ・旧宗主国の学問空間に「侵入」
- ・知の在り方に根本的変化を迫る

ネイティブの学者とは

- ・語義的には、調査対象の集団に属する研究者。
- ・実際には、自分の集団とは距離がある。旧宗主国で教育を受けている人が多いから。
- ・旧宗主国の非ネイティブの学者との決定的違い＝調査される側の一員としての認識（アイデンティティ）が強く、研究対象の人びとと関心や利益を共有している。

5 知里：典型的なネイティブの学者

- ・幌別町（現・登別市）のアイヌの名家に生まれ育つ。
- ・父の高吉は金田一京助と親交があった。
- ・母のナミと母方オバの金成マツは英国宣教師バチラーに洗礼を受け、布教活動。
- ・姉の幸恵は『アイヌ神謡集』の著者。



2005年12月撮影

- ・1909年（明治42年）、真志保 誕生。
- ・室蘭中学卒業後（1920年、20歳）、幌別の役所に勤めるが、間もなく退職。
- ・金田一の経済的援助を得て、東京の第一高等学校に進学（1930年、21歳）。
- ・東京帝国大学文学部英文科に入学（1933年、24歳）。在籍中、アイヌ語学に転じ、金田一に師事。
- ・『アイヌ語法概説』卒業論文（1936年、27歳）。
- ・『アイヌ民謡集』同年大学卒業。大学院進学（1937年、28歳）。
- ・樺太の豊原高等女学校に赴任（1940年、31歳）。
- ・北海道大学の専任講師（1949年、40歳）。
- ・『分類アイヌ語辞典 植物編』（1953年、44歳）。
- ・『分類アイヌ語辞典 人間編』（1954年、45歳）。文学博士。
- ・『辞典 人間編』で朝日文化賞受賞（1955年、46歳）。
- ・北海道大学教授（1958年、49歳）。
- ・1961年（昭和36年）、52歳で逝去。『著作集』年譜、藤本英夫（1994）より

- ・先住民アイヌにとっての《植民者＝支配者＝和人＝旧宗主国・日本》で、最上級の教育。
- ・第2言語のアイヌ語について書いて荣誉に輝く。
- ・旧土人と蔑まれた母集団・アイヌとは社会的に相当な距離がある。同時に、和人の中で民族差別を受け、アイヌとしてのアイデンティティを強めた。→ 典型的なネイティブの学者

6 距離の学問的効用

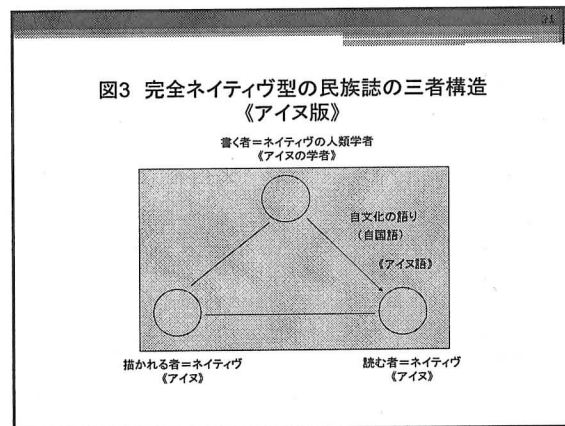
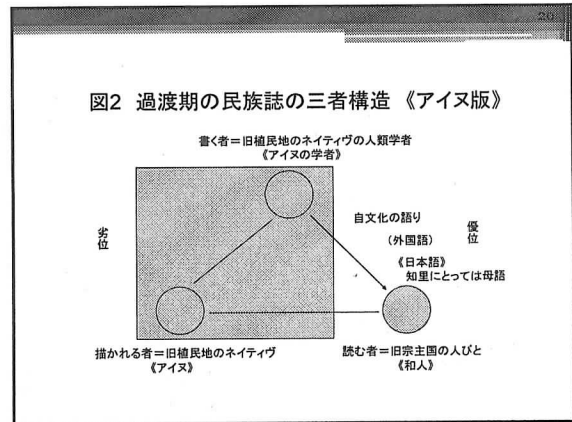
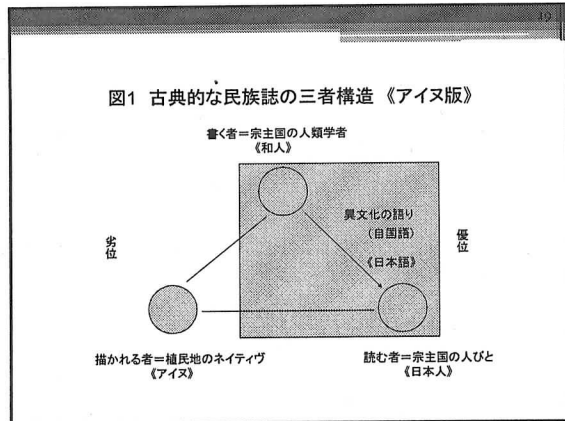
- ・知里にとってアイヌ語は第2言語であった。
- ・「私は父母がアイヌ語を使うのを殆ど聞いたことがなかった。だから、祖母と共に旭川市の近文コタンで人となった亡姉幸恵は別として、私達兄弟は少年時代を終えるまで殆ど母語を知らずに通したといつてよい。私が意識的にアイヌ語を学び始めたのは、実は一高に入ってからのことである。本来は母語であるはずのアイヌ語も、私に関する限り、英語・仏語・独語などと全く同様に、はるか後になって習得された外国語にすぎない」（『アイヌ民謡集』後記より）

- ・言語的に知里はネイティブではない。
 - ・このアイヌ語との距離（外部者性）こそ、言語研究における知里の強みではなかったか。
 - ・母語とは距離がとりにくい。
- =====
- ・もし知里がネイティブであったら、自分自身をインフォーマントとしていたであろう。
 - ・「外国語」であったからこそ調査をした。
 - ・質問）どのような調査をしたのか？ インフォーマントのアイヌとは、どのような関係にあったのか？ 『分類アイヌ語辞典』には、人の情報源があまり書かれてない。

- ・対照的に、資料の採集地（データを集めた場所）には、十分注意している。
- ・『辞典 植物編』の序言には、「従来の文献に見られる欠点（5）」として、「どこの方言か不明なこと」とある。
- ・参考）萩中美枝・切替英雄（編）『知里真志保フィールドノート』（2002～）
- ・近年の文化人類学は、文化研究の主観性、特にフィールドにおける研究者とインフォーマントの関係に注目している。

7 民族誌の三者構造

- ・民族誌（ethnography）＝ エスノグラフィー
- ・フィールドワーク／現地調査に基づいて、特定の民族について叙述したもの。
- ・民族誌を構成する要素
 1. 書く者＝調査者
 2. 描かれる者＝被調査者
 3. 読む者：書く者と同一の言語文化共同体の成員が圧倒的に多い。



8 ネイティブが語るための条件

- ・概して、知の世界システムにおいて、ネイティブの語りは軽視・無視されている。
- ・ネイティブの学者が、ネイティブについて語ったからといって、無条件に学界や論壇で受け入れられるわけではない。
- ・学界はマジョリティ（社会の主流）が支配している。彼らに説得力を持たない限り、どんなに優れた研究も評価されない。

- ・異文化・異言語の研究では、ネイティブは旧宗主国の「彼ら」の観点から見て語らないと評価が低い。読者が「彼ら」だからである。

彼ら＝植民のマジョリティ＝和人

我々＝先住のマイノリティ＝アイヌ

- ・どのように「彼ら」の観点を獲得するか？
- ・「彼ら」の間で教育を受けるしかない。
- ・この点、どんなに辛い民族差別を受けても、知里が一高と東大という日本の超エリート校に通ったのは、「彼ら」の観点の獲得に役立った。

一高における差別

- ・「私が一高に入った当時、（中略）一高生は、田舎から出てきたばかりの、それでなくてさえある種の引け目から終始おどおどしていた私を包圍して、『熊の肉や鮭の肉を主食として育った君が、こちらへ来て米の飯ばかり食べていて体には何とものないか』とか、『口辺に入墨をした娘を見慣れた眼に、日本娘はシャンにみえるかい』とかいった類の、とりようによっては随分と痛い質問を浴びせては、気の弱い私をひそかに泣かしたものであった」（『アイヌ民譚集』後記より）

- ・こうした体験は、日本の将来を担う若いエリート層が、実際に何を考えているのかを知る機会を提供した。
- ・それは、当時の辺境・北海道やアイヌ社会の中にだけいては、決して身につかない「彼ら」の視点の獲得を意味した。
- ・知里は喧嘩のルールを覚えたのであり、「彼ら」と同じ土俵に上ったのである。
- ・知里は他の研究者を辛辣に批判して反感を買ったが、それは相手が知里を真剣に受けとめた証拠でもある。皮肉にもコミュニケーションは成立していた。

「彼ら」の観点と文化的翻訳

- ・日本を外国人に説明するのは難しい。
- ・アメリカで味噌汁を何と説明するか？
- ・化学的説明 (miso + H₂O) は意味を成さない。
- ・アメリカで「おふくろの味」「家庭料理」に相当するものを示して、味噌汁とは●●のようなものである、と言うのが効果的。
- ・さて●●は何か？
- ・「彼ら (=アメリカ人)」を知らないと、「我々 (=日本人)」について、英語で効果的に語られない。

- ・文化人類学にはこのような文化的翻訳が多い。
- ・質問) 同様の翻訳は知里の辞書作りや民族誌に見られたらどうか？
- ・『樺太アイヌの生活』(未発表原稿、『著作集3』)
- ・日本語で書いた以上、想定された読者は主に和人であるから、知里の著作は意外にも和人の観点から書かれたのではないのか？

和人化した知里のアイヌ批判

- ・《彼ら=和人》の視点を身につけた知里は和人化しており、同胞に鋭い批判の矛先を向けた。
- ・「視察者や遊覧客の意を迎うべく、故意に旧態を装って以って金銭を得ようとする興行的なコタン」(『アイヌ民謡集』後記より)
- ・「アイヌ協会〇〇支部総会、於〇〇宅、会費250、ただ投げたようなもの、宴会ごとにこの連中の精神の低さが鼻につく。今年は酒の席はできるだけ避けたい」(第2次世界大戦後、北海道アイヌ協会の、とある支部総会に出席して。藤本1994:97)。

- ・学問の和人化とは、近代日本が深い影響を受けた、客観性を重視する西洋科学への傾倒を意味する。その観点から、知里は和人とアイヌの双方を批判した。
- ・『アイヌ語入門』の最初で、河野広道を「K氏でいどのアイヌ文法の知識」、「だからシロートはコワイ！」と酷評。
- ・同書「古老かならずしも真を語らず」の見出しで、次のような戒めがある。「アイヌの古老——上に紹介したY氏のような興行用(?!)の‘アイヌの古老’ではなく、ほんもののアイヌの古老——でも、かならずしも常に真実を語るものではない。そのことは、わたくしなど、

長いアイヌ研究家としての生活の過程において、イヤというほど思い知らされているのである。だから、たとえ古老のいったことでも、一応は吟味してかかるくせをつけておかなければならない」(『アイヌ語入門』より)

- ・とはいっても、知里はアイヌとしてのアイデンティティは強く持っていたので、和人化によってアイヌと和人の双方から疎外されていった。
- ・北大教授・武田泰淳「氏はおそらく、日本人の学者たちの間で孤独であったばかりでなく、『選ばれたもの』であったがゆえに、同族の間でも孤独であったのだ」(藤本1994:201)
- ・両方の世界の周辺に生きたマージナル・マン。

知里＝アイヌという和人の認識

- にもかかわらず、和人から見れば、知里はアイヌ以外の何者でもなかった。
- 知里はアイヌだからアイヌのことがわかる、アイヌだからアイヌ語ができるのだ、という暗黙の評価。金田一京助にも見られた。



- 『アイヌ民謡集』は、「今まで出た吾々ストレンジャー〔異人〕の筆に成るものと、本質的に価値を異にするものであり、かつ、姉さんの『アイヌ神謡集』が既にそうであったように、今度も吾々ストレンジャーによって歪められざる、純真な話し手の言語感情を知る（以下省略）」（序より）

- 知里にとってアイヌ語は母語ではなかった。それだからこそ、彼は「外国語」のように勉強して、さらに調査した。アイヌだからアイヌ語が分かるというのでは、言語学者としての彼の能力と業績を根本から否定してしまう。

- 『アイヌ民謡集』後記における知里の反発。

- 「金田一先生が本書巻頭において『吾々ストレンジャー』によって歪められざる、純真な話し手の言語感情を知るために云々」と仰せられたのは、やはり一般の先入観念であって、不用意にも歪められたお言葉である。私がその中に生れ、それと共に十数年間生活してきたところの日本語においてこそ、本当の言語感情が湧くであろう。僅か数年の、それも総計して十回に満たざる帰省によって、片手間に得たアイヌ語の知識は、言うところの『話し手の言語感情』なるものからは、いまだまだ遠い所にあるのである。もしもそういう意味において、私の訳文を一般の翻訳と別価値に見ようとするならば、それはとんでもない誤解であることを、特にお断りしておく。」

9 J. バチラーと世界システム

- 英国聖公会宣教師ジョン・バチラー (J. Batchelor, 1854-1944) に対して、知里は猛然と批判した。
- バチラーは、日本の同化政策に苦しむアイヌ民族に手を差し伸べ、「アイヌ民族の父」などとも称される。
- マツ・ナミ姉妹に洗礼を施す。
- 向井八重子を養女にとる (1906)
- 布教のため聖書をアイヌ語に翻訳。
- 『アイヌ・英・和辞典』第4版まで



知里のバチラー批判

- 「ジョン・バチラー博士のアイヌ語研究」1942
 - a. 「アイヌ語の言霊を虐殺して顧みざる者」
 - b. 「全くの出鱈目が多い」
 - c. 「見かけ倒し」
 - d. 「どれもこれも駄目」
 - e. 「完全に無能ぶりを遺憾なく発揮」
 - f. 「バチラー博士の目は完全な節穴」
 - g. 「いい加減なもの」

- 『アイヌ語入門』(1956)、第三部、第10章「バチラー博士の辞書」では、より仔細に批判

1. 幽霊語と幽霊合成語（特に聖書用語）の掲載
2. 多数の誤訳と不完全な訳
3. 語形の歪み
 - a. 実存しない音を聞き取っている。
 - b. なくてはならない音を聞き落としている。
 - c. 聞き違いが多い。
4. その他もろもろの欠陥
 - a. アクセントの表示がない。
 - b. どこの方言か不明。（注）知里は言語の地域差を重視した。
 - c. 掲載された語彙の貧困。
 - d. 用例の不正。

- ・バチラーの辞書を「見かけ倒しのウドの大木」と呼んだ知里は、彼を称えたチェンバレン（英国の日本研究家、東大の外国人教師）や金田一を批判して、次のように結論づけた。

- ・「この辞書は、斯界の権威者たちの叩く景気のいいお太鼓の音に送られて賑々しく学界に船出してもらい、順風満帆、手痛い批判の嵐に遭遇することもなく、（中略）いまやこの方面における世界最高の権威書として、いやしくもアイヌ語について論をなす者の必ず参照すべき典拠となっている。（中略）その世界的名声にもかかわらず、この辞書の正体をあばいてみれば、上記のごとく、まったくいい加減なものにすぎなかったのである。」

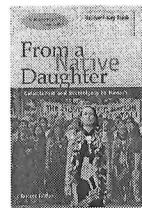
- ・大御所を批判したことで知里は敬遠されたが、彼の本意は『アイヌ語入門』の最後の言葉（太字で印刷）に表れている。
- ・「アイヌ研究を正しい軌道にのせるために！」

- ・しかし、それは知の世界システムで周辺化されたネイティブによる、自文化の語りの奪還の試みではなかったか、という解釈もできる。

アイヌによるアイヌ研究の奪還

- ・まず、和人化したとはいえ、アイヌとしてのアイデンティティを強く持っていた知里は、アイヌの言語や文化についての語りが、金田一をはじめとする和人によって独占／支配されていることを不快に思っていたのではないか。

- ・これは今日のネイティブの学者によく見出される感情。例）ハワイ先住民による民族復興運動



H-Kトラスク著『ネイティブの娘より』(1999)

- ・さらに、バチラーは英国人であったから、知里から見れば「他者の他者」である。この二重の他者が、知の世界システムの中心にいる自国の力を背景に、怪しい説を得々と発表して、世界の権威とみなされていることに、腹が立ったのであろう。

- ・知の世界システムにおける力

1. 使用言語：英語は世界的に流通する。
2. 自国の国際的地位：大英帝国の威光。
3. 出版社の流通網：バチラーの辞書は日本で刊行
4. 研究費の額

知里のナショナリズム

- ・バチラーに対する反感の裏には、戦前の日本のナショナリズムの影響が見られる。
- ・例）自己を中心にして所有・所属を明示する英語の性質（「頭が痛い」を「我は頭痛を所有す」など）を指して、英語には「総てを自己中心に考えたがる癖」とあると指摘。
- ・「博士ともあろう者が、一体どうしてこうも眼が見えなかったのであろうか。結局彼も自己中心にしかものを考えることのできないアングロサクソンの一人だったからである」。

- ・日本の「醇風美俗」としての家族主義・集団主義と、西洋の悪しき個人主義を対置して国民を鼓舞するのは、戦前のナショナリズムの典型。
- ・「ジョン・バチラー博士のアイヌ語研究」の最後の見出しは「米英残存勢力の殲滅（せんめつ）」
- ・「東洋言語学が確立された暁にアイヌ語学の勤め得べき役割の決して小ならざるを思ふ時、学会に於ける米英の残存勢力をこの方面に於いても徹底的に捕捉殲滅しておかなければならないことを特に痛感するものである」1942年（昭和17年）。
- ・1940年、バチラーは60年以上住んだ日本を離れ帰国。1944年没。

知里の国際的認知度は？

- 質問1) 日本では知里の業績は高く評価されているが、国際的にはどうか？
- 質問2) 知里の著作は、事実上の国際語となった英語に、どのくらい翻訳されているのか？
- 英国 British Library には、知里のアイヌ口承文学の翻訳に関する論文(2008)が1点のみ。アメリカの Library of Congress には、知里の著作類が4点、知里に関する論文が2点。

- 質問3) 知里の『分類アイヌ語辞典』を他言語、特にヨーロッパ系の言語に訳すことは可能か？

- 日本人(和人とアイヌを含む日本語のネイティブ・スピーカー)を読者として想定しているので、たとえ訳したとしても、日本の言語文化的文脈を知らない人には、彼の辞典の特徴である言葉の背後にあるものの説明が、十分伝わらないのではないか。

ご清聴
ありがとうございました



2005年12月撮影